

安心して暮らせるまちづくりのために

栄・防災ボラネット通信 最終号

発行：横浜栄・防災ボランティアネットワーク

44号
2025.10

ボラネットは感謝と共に閉幕します。そして・・・

「横浜栄・防災ボランティアネットワーク」(ボラネット)は2006(平成18)年10月17日(火)栄区役所で設立総会を開催し、19年間活動をしてきましたが、通信42号・43号でお知らせしたように、10月末日で解散します。15日(水)には最後の運営委員会を行い、解散に関わる整理作業や会員への通知(今年度の活動報告・会計報告など)の手順を確認しました。11月中にメールリストにより配信させていただきます。

近年は豪雨による災害が増えています。思えばボラネット誕生の契機になったのも2004年に発生した台風22号が10月8日(金)～9日(土)にかけて栄区を直撃し大きな水害を起こしたことによります。9日区役所から社協にボランティアの要請があって、男性ボランティア団体に連絡を取り、急遽集まったメンバーがその日のうちに現場に駆け付け、暫くの期間活動が続きしました。その後、「災害時に活動するボランティア組織が必要」と有志で勉強会を続け、区・社協等の協力でボラネットは誕生しました。



◀台風22号による被害状況・現地に集合したボランティア・重い畳上げ作業▶

活動の大きな目的は、「災害ボランティアセンター」(ボラセン)の運営協力で、毎年ボラセン訓練を区・社協と一緒にしてきました。その為に必要な研修会・勉強会も数多く開催しました。また、地域の防災力向上に寄与するために防災講座やイベントへの協力も大きな活動となりました。他区との連携(Bブロック会議)にも参加しました。

しかし、様々な要因により解散を選択しましたが、会員はじめ、これまで多くの団体・個人の皆様に多方面に亘ってご支援・ご協力をいただきました。改めて感謝申し上げます。これからも、それぞれのお立場で防災について取り組んでいただければ幸いです。

2025年9月1日(月)「防災を考える会・さかえ」設立

ボラネットの解散手順を進める一方、新たなグループの立ち上げを模索してきましたが、現運営委員のほぼ全員と希望者を含め20名(個人)が参加する形で「防災を考える会・さかえ」が誕生しました。会則には(目的・活動)第2条として次を掲げています。

1. 個人や地域の防災力を推進するため、幅広い研修会や勉強会などを行う。
2. 防災に関する講座やイベントなどの協力要請に対して随時対応する
3. 災害時に「災害ボランティアセンター」が設置され、栄区社会福祉協議会からの要請があれば、その運営に協力する。

会員の知識やスキルを高めつつ、地域の防災力向上にできる範囲で貢献していきます。(文責:大森)



福福島・宮城研修

横浜栄・防災ボランティアネットワークは皆様のご支援・ご協力によりこの10月に満19年を迎えました。この間大きな災害も無く研修会・防災講座・他の防災組織との連携等により、地域の防災力向上を行ってきました。ありがとうございました。

この間、東日本大震災の被災地（福島県、宮城県）を2016（平成28）年5月に会員22名と共にバスの一泊研修として訪れたことが思い起こされます。現地ではNPO法人の松本理事長、山元の未来への種まき会議代表渡邊先生から当時の様子や現状までの経緯を伺いました。また山元町では津波で残っている、崩れかかった小学校を見学し、津波の恐ろしさを見学しました。往復のバス内ではいろいろのテーマで皆様と意見交換が出来ました。宇田川淳

日常の防災

1989（平成1）年～2018（平成30）年、30年間「たんぽぽ」の代表を担い、高齢者や障がい者と多くの時間を過ごしてきた中で、常に心配だったのが災害時の対応でした。2004（平成16）年に発生した台風による被害が契機になり、勉強会・準備会などを経て2006年（平成18）年に設立した当会に最初から参加したのも、自身が学習した防災の知識を要援護者に伝えたい思いからでした。防災に精通した幅広い皆様との出会いがあり、その力をお借りしつつ多くの防災講座に協力してきたのも「日常の防災」を伝え続けることが重要だと思つたことでした。ボラネットでの繋がりを大切にしながら、今後もできる活動を続けようと思います。大森眞由美

伊勢湾台風の記憶

1959（昭和34）年9月26日という日を忘れることができない。私の生まれ故郷は三重県の「長島町」（現・桑名市）という細長い島で木曾川、長良川、揖斐川の最下流の

あたり、伊勢湾の最奥部に注ぎ込む地域である。満潮時には水面が土地より高くなるため、島全体を堤防で囲う「輪中」と言われるところである。そんなところに伊勢湾台風が襲いかかり、高潮のため、島全体が水没した。小学校5年の時である。赤組・白組で同級生80名のうち11名が亡くなった。小学校全体が丸ごと津市に疎開することになり、集合地まで米軍のヘリコプターで運ばれた。65年以上前のこととなる。「災害は忘れたころにやってくる。忘れないことこそ最大の防災」である。大橋美根生

マッチ1本の明かり

私たちの日常生活の中では、真の暗闇を経験することは、非常に少ない。若かりし頃の登山で、真の暗闇の中でマッチ1本の明かりがどれほど心強かったことか、思い出として残っている！その後の「横浜栄・ボラネット」の研修会の中で、NPO法人レスキューストックヤードの「栗田暢之（のぶゆき）」氏の話の中にも同様なことを言われていた。それ以降、出掛ける時の私の手元には、常に、ミニライト（LEDキーホルダー）とホイッスル（STORMセーフティ）がある。「横浜栄・ボランティアネットワーク」の人と人の繋がりの中で、多くの事を学ばせていただいた。人は一人では生きては行けないことを!! 佐野勝彦

新聞紙で作る防災スリッパ

「新聞紙スリッパ」を教えて頂き、その後、新聞紙で作るスリッパなど、いろいろと調べてみました。他の方法もありますが、教えて頂いた新聞紙での折り方の方法が足にじっくりし、かかとかから足が抜けず利便性があり、大いに活躍するのではないかと考えられます。地震などの災害時には、ガラス、陶器等の破片などの散乱があります、裸足で歩くのはとても危険です。「新聞紙スリッパ」を作成すれば、安全に歩くことが出来ます。新聞紙は防寒などにも使え、防災

バックに入れておいても薄くて軽いので、邪魔になりません。「新聞紙スリッパ」は誰でも簡単に作れる防災グッズのひとつと考えます。 式田正利

10周年記念研修旅行の思い出

2011年3月11日巨大地震が発生した。東日本大震災である。マグネチュード9.0。

私の災害ボランティア活動元年でもある。設立10周年事業の一環として、発災5年後の2016年5月11～12日「南相馬市、山元町 研修・視察一泊旅行」を企画した。参加者は22名、関心度が伺えた。初日は南相馬市小高地区災害ボランティアセンターの関係者から受け入れの苦労話を、二日目は山元町の元中学校長、渡邊修次氏より「避難所の運営」の在り方を伺った。氏は現在も「かたりべ」としてご活躍と聞く。山元町では現在『地震遺構中浜小学校』になっている生々しい爪痕を見学した。児童は屋根裏（ペントハウス）に垂直避難し、難を逃れた事は有名である。南相馬は「相馬野馬追」で有名。山元町は宮城県の南、福島県境（相馬市）に位置している。現地で活動すると必ず名物イチゴを買い求め復興に寄与した。途中飯坂温泉に一泊し親睦を深めた。 早福修二

ボラネット会員として

なぜ会員になり継続できたんだろう。キーワードは「阪神淡路大震災」「防災」「生育地」と「地学専攻」。現場でのボランティア経験なし。災害への備えは平時から「備えよ常に」と地元での防災講座などの啓発活動として、東北、熊本と縁ある地での大災害、現地訪問や情報入手が容易だったこと、日常活動では精神障害者への支援について現状を話せたことなどが思い出される。皆と訪れた福島では普段の生活での人々のつながりが災害時に役立つと学び、平時の備えを重視することは間違っていないと強く感じた。年月を経て会は解散するが、受援力も高めなければならぬ歳になり、変化する状況に何処まで対処できるのか。これからの課題に再挑戦。 藤田みちる

ホッ そしてちょっと残念

今から5年前、2020年8月にマッチングシステムの研修会を開催しています。このシステムは多数のボランティアを効率よく登録し、一方ニーズをデータベース化してボランティアとニーズをシステム上でマッチングさせ、ボラセンをシステムチックに運営しようとするものですが、市社協はキントーンのシステムを採用し、従って我々のシステムはボツとなりました。システムの運営・維持・管理を考えると開発者としてはかなり重い気分になっておりましたが、お蔭様で「ホッ」とした次第です。そしてちょっと残念な気分を味わいました。栄防災ボランティアネットワーク存続中は大きな災害もなく幕を下ろすことができそうで、これが一番の「ホッ」ですね。

松田成人

ボラネットの思い出

ボラネットの活動の思い出として忘れられないのは、2016年5月に10周年記念研修会として1泊2日で東日本大震災から5年が経過した福島県南相馬市と宮城県山元町を訪れ目にした光景です。特に大津波の中で建物が残った山元町中浜小学校の光景です。2階の天井付近まで押し寄せた津波の跡が残る校舎と、外で全国から励ましのメッセージが書かれ送られてきた黄色のハンカチがなびいていた光景はいまでも思い浮かびます。中浜小学校は廃校になりましたが校舎は大津波の痕跡を出来るだけ残し整備され、震災遺構として一般公開されています。 柳澤恵子

編集後記にかえて

栄・防災ボラネット通信44号最終号をお届けします。これまで記事をお寄せいただきましてありがとうございました。通信を読み返してみて、多彩な方々が多方面で活動を展開してきたことがよく分かります。これまでの活動で得た知識や経験を、これからも広く地域に伝えていきましょう。 山崎咲恵

